

## 大学は偶然のスクランブル交差点



若 者

神野 崇馬\*

University is scramble intersection of chance

Key Words : Planned, Happenstance, Theory

### はじめに

私は、2020年3月25日に大阪大学基礎工学研究科の博士号を取得し、9年間通った大阪大学を卒業した。執筆のご依頼を頂いた時期が卒業の時期だったので自分の大学生生活を振り返りたい。タイトルは、私の大学生生活の感想を一言でまとめたものである。その名の通り、私の大学生生活は偶然の連続であり、まさか自分が博士号をとるとは夢にも思っていなかった。というのも、学部生の時はサークル、スマホゲーム、バイトに明け暮れ、留年に片足を突っ込んだ時もあり(頼み込んで何とかして回避できた)、学部で卒業して就職するつもりでいた。そんな私がその後の大学生活で博士課程に進学するという、人生を変えた偶然について記す。これを読んで下さっている人も大学でこんな偶然があって今があると思いきこす機会となって頂けると幸いである。

### 阿部研究室への配属～恩師との出会い①～

私の大学生活で最も大きな影響を与えた偶然は阿部研究室に配属されたことである。偶然というのは、阿部真之先生は私が研究室に配属されると同時に大阪大学基礎工学研究科の教授に着任した。さらに、私の成績が良くなかったため、第一希望から外れ、第二希望の阿部研究室に配属された。第二希望にした理由は研究室紹介のプレゼンで面白そうな先生だ

と思ったからだ。

第一希望の研究室に外れたお陰で師匠であり、恩師である阿部先生と出会うことができた。阿部先生には、配属当初は自分には何ができるのかわからず、研究の「け」の字も知らない私に手取り足取り指導して頂いた。さらに、研究に対する姿勢も尊敬している。全く新しいものを取り入れ、今までにないものを生み出そうとする姿勢や、失敗を恐れずに果敢に挑戦する姿勢を身をもって学んだ。阿部先生のご指導のお陰でこんな自分が、学振特別研究員への内定、研究予算獲得、論文投稿、学会発表での受賞など、実力以上の成果をあげる事ができた。

### 電磁ノイズ研究の選択～恩師との出会い②～

研究テーマは研究室に配属されてから、幾つかの候補の中から選ぶことができた。私はその中の一つにあった「電磁ノイズ」という研究テーマに興味を持った。阿部先生が阪大に来て新しく始めたテーマであり、これは理論を扱うからいっばい勉強しないといけないよと言われた。最初は迷ったが、これまで遊んでばかりいた自分の行いを改めるためにもこのテーマを選択した。たまたまこのテーマに興味を持ったお陰でもう一人の師匠である土岐博先生(大阪大学基礎工学研究科 特任教授、同学名誉教授)と出会うことができた。そもそもこの研究テーマは土岐先生が仕掛け人でいくつかの大学の先生に話を持ちかけていたが、誰も興味を示さず、その中で阿部先生が興味を持ち、かつ阿部先生が阪大に赴任してきたことをきっかけにこの研究は始まった。そこから僕の電磁ノイズ研究が始まった。最初は全く理解できず苦しんでいたが、土岐先生は何でも興味を持ち、目をキラキラさせて、とても楽しそうに研究をしていた。一緒に実験や議論をしているとそのうち自分も何だか研究が楽しくなった。土岐先生は理



\* Souma JINNO

1992年1月生まれ  
大阪大学大学院 基礎工学研究科 システム創成専攻博士後期課程 (2020年)  
現在、日本学術振興会特別研究員 (PD)  
大阪大学基礎工学研究科 阿部研究室  
TEL : 06-6850-6304  
FAX : 06-6850-6341  
E-mail : soumajinno117@gmail.com

論物理の研究者であり、自分のような一学生が名誉教授の大先生に指導して頂くなど非常に恐縮であったが、非常に贅沢な時間であった。理論をベースに一から未解明の物理現象を解明することを教えて頂いた。これまで学んだ理論を使って実世界の現象を再現するというプロセスが楽しくて仕方なかった。

### 大学発ベンチャーという道

恩師と研究テーマとの出会いに加えて、私の博士後期課程への進学を後押ししたのは大学発ベンチャーとの出会いであった。それは阿部先生に偶然誘われた産学連携のイベントである。最初はよく分からなかったのが興味はなかったが、師匠の言うことなのでイエスと二つ返事で参加した。私は大学が行う研究と企業が行う事業は相反するものだと思っていたので、大学の技術を使って起業する道があると知った時は衝撃的であった。自分のモチベーションは世の中の役に立つことだったので自分の研究で得られた技術を使って起業したいと思うようになった。研究の最終的な目的は世の中をより良くすることであり、それが実現されると、どれ程の価値に繋がるのかをお金で換算するという視点は研究者にも必要であると思った。その後、大学発ベンチャーの人材育成プログラムでUCSD（カリフォルニア大学サンディエゴ校）に行くことができ、大学発ベンチャーを多数生み出しているエコシステムを学んだ。自分と同学年、あるいは下の年代の学生が自信を持って自分の事業プランをプレゼンしている光景は非常に刺激的だった。さらに、OUVC（大阪大学ベンチャーキャピタル）にもインターンに行かせて頂き、大阪大学の魅力的な技術を事業化するための蓋然性を評価するという大学院の研究ではできない経験をさせて頂いた。以上の過程を経て、博士後期課程に進み研究を続けたいと強く思うようになった。

### さいごに

以上の3つの偶然の出来事があったお陰で、私は博士号を取ろうという進路を選択した。いずれの一つも無ければ今とは全く違う進路を選択していただろう。私は大学で9年間を過ごしたが、何年いても飽きない場所であった。それは、大学は予期しない偶然が起こりやすい場所であったからだ。大学は異なる環境で育った、年代も人種も違う人々が同じ場所と時間を共有する場所である。まさに偶然のスクランブル交差点である。

最後に、ジョン・D・クランボルツ氏が提唱している偶然を活かすために重要な5つのスキルについて紹介する。その5つは、「好奇心」、「持続性」、「柔軟性」、「楽観的」、「冒険的」である。自分は、この5つの要素を意識したことで偶然を活かすことができたと強く思う。私は博士進学を選択をして本当に良かったと思う、また今後どのような偶然によって自分の人生の進路が変化していくのかとても楽しみである。

### 謝辞

このような由緒ある季刊学際技術誌に自由に原稿を執筆する機会を与えて下さった、大阪大学大学院基礎工学研究科 教授 阿部真之先生に心より感謝申し上げます。

### 参考文献

- 1) K. E. Mitchell, S. Al Levin, and J. D. Krumboltz, "Planned Happenstance: Constructing Unexpected Career Opportunities," *J. Couns. Dev.*, vol. 77, no. 2 pp. 115-124, 1999.